

九州における前方後円墳の築造動向

柳沢 一男

(宮崎大学教育文化学部)

はじめに

四国における前方後円墳を含む古墳の築造状況は、はやく大久保徹也が指摘したように、古墳分布が著しく偏在する「不均等分布」に特色がある(大久保1996 a・b)。この視点はさらに橋本達也によって深められ、王権や他地域との情報・物資の伝達・交流の視点から地域の個性の変質過程が整理されている(橋本1998、2000)。こうした四国の古墳分布状況と広域変動は、九州の古墳を主たる対象としてきた筆者にとって理解を超え、大きな衝撃を受けた。

目算にすぎないが四国の面積は九州本島のおおよそ半分程度、古墳総数の比較はとてもできないから前方後円(方)墳の数を比べると、九州が約640基、四国が約120基である。古墳時代の政治中枢域により近く、瀬戸内海という人・物資・情報の大動脈に接しているにもかかわらずである。周防灘を挟んで東九州と対面する松山平野では、前方後円墳の大半が後期の築造であるという。周防灘・豊後水道を挟んだ豊前・豊後では、海岸線のあいだに点在する平野部を中心に、前期から後期にわたる70基以上の前方後円墳が築造されている。

小稿はこうした顕著な地域性と展開過程での変容に刺激を受けて、九州全域の前方後円墳の築造過程を見直す作業をすすめている。しかし、作業量が膨大かつ多岐にわたるため、検討作業は進行中である。ここでは整理中の首長系譜の変動についての作業成果の一端をしめすにとどめたい。なお最後に、松山平野の後期における前方後円墳築造状況に近似する九州豊前地域との関連に触れることにする。

1. 古墳分布域の地域区分

列島南西端に位置する九州の古墳分布は、玄界灘の対馬・壱岐島を北限とし、薩摩・大隅を南限とする。はやくに森貞次郎が指摘したように、古墳分布はそれぞれ異なった方向の外洋に連なる4つの地域に大区分される。①北部の玄界灘沿岸域(肥前北部・筑前北西部)、②北東部の伊予灘・豊後水道沿岸域(豊前・豊後北部)、③中西部の有明海・八代海沿岸域(肥前南部・筑後西部・肥後、および薩摩北部)、④東南部の日向灘・志布志湾沿岸域(日向・大隅)である。なお、南西端の薩摩南部は、古墳時代を通じて基本的に高塚系墳墓を採用することがなかったらしい。

以上の4つの分布域は地理・地形的に繋がりが顕著で、古墳の属性にも一定の共通性がみとめられる。たとえば、東南部の日向・大隅地域では、前期後葉から中期初頭の前方後円墳のほとんどに前方部が狭長な柄鏡形類型の墳形が、また中期以降には中小墳を中心に

表1 地域別前方後円墳数

①北部 (総数 218 基)	
肥前	25
筑前	193
②北東部 (総数 77 基)	
豊前	42
豊後	35
③中西部 (総数 172 基)	
肥前	62
筑後	44
肥後	64
薩摩	2
④南東部 (総数 192 基)	
日向	171
大隅	21

※前方後方墳を含む

※北部は壱岐・対馬を含む
2004.1月現在

地下式横穴墓が広汎に採用される。中西部の有明海・八代海沿岸域では、前期後葉から中期にかけて前方後円墳や中小墳に阿蘇石製の刳抜式石棺が、中期には大型墳を中心に石製表飾が共有される。横穴式石室が一般的となる中期には特徴的な肥後型や筑肥型が広がり、石室内部に彫刻系装飾をともなうことがある。北部の玄界灘沿岸域では中期に北部九州型横穴式石室や竪穴系横口式石室が顕著に展開する。北東部の豊後では、前期の埋葬施設に結晶片岩を使用した箱形石棺が卓越し、中期初頭に阿蘇石製刳抜式石棺に転換する。四国との関係で言えば、大分平野周辺の前期中葉～中期初頭の前方後円墳頂に石英小円礫を敷く例があることは注意されてよい。

これらの4区分した地域における前方後円墳の分布状況は、海岸線に沿って小平野が点在する北部や北東部と広大な筑後平野が広がる中西部では様相を異にするが、一定の地形的まとまり(領域)を成立基盤とする首長系譜を構成する点は共通する。一方、大分県こくまやま小熊山や鹿児島県飯盛山、熊本県野津古墳群、福岡県新原・奴山ぬやま、須多田古墳群などのように、海岸線に近接した臨海性の古墳や古墳群もある。これらは、多様な生業活動やより広域の成立基盤を想定したほうがよいだろう。なお、東南部の宮崎平野では、段丘上の限られた墓域に異常なまでに前方後円墳が集中する例(西都原31基、川南25基など)がある。西都原は前期に6～7単位の造墓単位からなる複数列型、川南は造墓単位を抽出しえないが前期に集中する。

2. 時期別の築造動向

つぎに、以上4地域における前方後円墳の築造動向を要約しておきたい。なお、前方後円墳の編年は前方後円墳編年を基準とするが、時期を細分できない古墳が多く、また10期区分では細部にすぎる嫌いもある。そこで和田晴吾の段階区分案(和田1987)を一部改変して、前期前半の1・2期を第1段階、前期後半の3・4期を第2段階、中期前半の5・6期を第3段階、中期後半の7・8期を第4段階、後期前半の9期を第5段階、後期後半の10期を第6段階として記述する。

(1) 第1段階

4つの大地域のいずれでも前方後円墳の築造が始まるが、築造数はきわめて少なく、北部と東南部に偏る。最初に築造されたとみられる古墳は、定式化した前方後円墳のほか纏向型前方後円墳に類似する一群や前方後方墳もみとめられる。

この段階にやや活発な造墓活動がみとめられるのは、北部の糸島・福岡、東南部の宮崎、中西部のおごおり小郡などである。出現時期に多少の跛行性が予想されるが、糸島では小河川流域を単位とする6つ程度の築造系譜が併存し、第2段階を通じて80～100級の大型墳が系譜間を移動する。宮崎平野では中小河川流域を単位とする多数の系譜が出現する。とくに小丸川・一ツ瀬川流域を中心とする児湯では、第2段階を含めると20前後の築造系譜を確認しうる。

この段階の大型墳は北部のくりそうざい久里双水、北東部の石塚山、東南部のいまいめ生目1号などがあり、墳長が100mないしそれを上回る。なかでも石塚山は長大型の竪穴式石槨に10面以上の青銅鏡を副葬し、そのなかに7面以上の三角縁神獣鏡を含む。まさに突出した古墳である。

(2) 第2段階

4つ地域を構成するほとんどの小地域で前方後円墳が登場する。この段階で顕著な大型墳がみられるのは、中西部の宇土半島基部・佐賀中部、北部の糸島・福岡、また北東部の東国東、南東部の宮崎などの小地域である。なかでも、宮崎平野は生目・持田・川南などの古墳群で100mを

超える古墳が6基とすこぶる活発な造墓を行っている。

一方、本段階末ごろを境に築造を停止する系譜や小地域がある。東北部の宇佐高部・川森古墳群は、前期のうちに5基の前方後円墳が継続するが本段階のうちに停止する。ふたたび前方後円墳が復活する第5段階まで顕著な古墳の築造はみとめられない。列島最南端の前方後円墳群である東南部大隅の塚崎でも、前期の段階に5基の前方後円墳が築造され、中期に継続しない可能性がたかい。

埋葬施設は、古墳調査例が少ないため全体を見通すことが難しい。長大型の竪穴式石槨は北部の唐津、中西部の宇土半島基部、北東部の宇佐で割石積みが、南東部の宮崎で河原石積みが知られているが、類例は少なく九州では少数派である。北東部の豊後では結晶片岩の板石を使用した箱形石棺が卓越する。中西部の肥後では菊池川下流域・氷川下流域で阿蘇石製剝拔式石棺の製作が始まり、大型墳を中心に採用される。本段階末の北部では、列島他地域に先駆けて横穴系埋葬施設が登場する。唐津の谷口は長持形石棺を内蔵する合掌式竪穴式石槨の小口を横口部とする特殊例だが、福岡の老司を経て糸島の鋤崎で定型化を達成する。

(3) 第3段階

前段階まで継続的あるいは間断的な前方後円墳を築造した系譜に大きな変化が生じる。前期に比較的安定した造墓を続けた小地域や古墳群での前方後円墳の築造停止、墳形が帆立貝形ないし大型円墳への転換、あるいは先行する築造系譜がほとんど不明瞭であった地域での築造が始まる。

北部では唐津・糸島・福岡・遠賀川下流域での変動が顕著である。糸島では丸隈山を最後に前方後円墳が姿を消し、前代からのいくつかの系譜で大型円墳を築造する程度にしょ減少する。これに代わって宗像の津屋崎で大型円墳の築造が始まる。前方後円墳の本格的築造は第4段階だが、その端緒といえるだろう。

中西部では、佐賀中部以西の小地域を系譜を統合するように墳長114mの船塚が築造されるが、その後は円墳化する。筑後では前期に活発な築造を続けた筑後川北岸の小郡から前方後円墳が姿を消し、東よりの甘木・朝倉で中小墳が短期に継続した。それまで顕著な前方後円墳が皆無に近かった筑後川南岸の久留米、八女に大型墳の築造が始まる。なかでも石人山^{せきじんやま}は墳長約120mとこの段階では九州北部最大である。棺蓋に直弧文・円文を彫刻した横口式家形石棺と内蔵する横穴式石室、石製表飾の採用など、肥後・筑前の諸属性を統合した新形式の属性を創出し、その後の中西部首長墳の規範となる。肥後では宇土半島基部～氷川下流域での衰退が著しい。菊池川中・下流域ではこの段階に大型墳の築造が集中する一方、次段階はいずれの系譜も規模を縮小するか、系譜自体をたどることができなくなる。この時期は白川上流の阿蘇カルデラ内の中^{なかどおり}通古墳群をはじめ、大型円墳がの築造が顕著である。

北東部の豊前・豊後はもともと前方後円墳の築造数が少ない地域だが、先述した宇佐とともに大野川中流域の小宇宙的な三重盆地での前方後円墳が築造を停止する。海部^{あまべ}の2系譜を統合するように墳長120mの亀塚が登場する。二つの埋葬施設があり、結晶片岩の大型石棺から阿蘇石剝拔石棺に変化する。亀塚とほぼ併行して、国東半島の東と西に墳長が80m級の大型帆立貝形古墳が登場する。亀塚に継いで築山が築造されるが、その後、国東半島以南の豊後では顕著な古墳が造られることがなくなる。

南東部の日向・大隅でもこの時期のはじめの変動は著しい。前期に盟主的系譜の位置にあった

生目は本段階の早い時期で築造を停止する。西都原では前期に併存した6～7の系譜での造墓が停止し、諸系譜を統合するように墳長約180mの女狭穂塚が登場する。仲津山類型の墳形で九州最大の規模である。女狭穂塚の築造と前後して、周辺の小系譜で前方後円墳の築造が停止し、川南・持田などの長期継続型古墳群でも墳丘規模が縮小するか一時的に帆立貝形に変化する。同時に、女狭穂塚の墳形をモデルとした大型墳が周辺域に築造される。女狭穂塚の築造に連動した変化であろう。列島最南端の大隅では塚崎系譜に代わって、肝属川対岸に墳長140mの唐仁大塚が登場する。唐仁古墳群は大塚の築造を契機として成立したのであろう。

埋葬施設をみると、北部では前方後円墳や大型墳の多くが北部九州型横穴式石室を採用した可能性がたかい。中西部では筑後の諸例を除いて不明なものが多いが、筑後南部の大牟田以南は刳拔式石棺が主体、八女・久留米から筑後側北岸域は横穴式石室である。肥前南部はよくわからないが、横穴式石室の可能性がたかい。肥後には肥後型横穴式石室が成立しているが、前方後円墳に横穴式石室が採用されるのは次の段階かららしい。北東部の豊後では結晶片岩板石箱型石棺から阿蘇石刳拔式石棺に転換する。東南部の日向は簡易な粘土槨の可能性がたかい。この段階の埋葬施設は地域の個性が顕著だ。

(4) 第4段階

4つ大地域のうち、中西部の筑後を除いて前方後円墳の築造数がもっとも減少する時期である。

北部では、末葉に一部の地域で前方後円墳が出現するが、基本的に宗像の津屋崎を除いて前方後円墳はほとんど築造されていない。糸島中枢域の三雲ではかろうじて帆立貝形が継続する程度、福岡も極小の前方後円墳が築造されたにすぎない。

中西部は上述したように筑後での築造が本格化する。前段階の石人山に継続して、久留米・三潞と八女に重層的な築造がみられるが、この段階の末葉に衰退した可能性がある。一方、筑後川中流南岸の吉井・浮羽の若宮古墳群に月ノ岡・塚堂の大型墳が築造される。前者は阿蘇石製の長持形石棺を内蔵した竪穴式石槨を採用し、甲冑が多量副葬される。後者は後円部・前方部にそれぞれ横穴式石室がある。肥後でも大型墳を輩出した前段階と比べて築造系譜の減少と墳丘規模の縮小が著しい。菊池川下流域の清原古墳群は、本段階から次段階初頭にかけて虚空蔵・江田船山・塚坊主の3基が継続する珍しい例である。江田船山は横口式家形石棺の直葬、3次の埋葬があり、2番目の被葬者に「ワカタケル大王」銘を刻んだ銀象嵌鉄刀が伴ったと推測されている。複数の金銅製装身具、全羅南道産の陶質土器などは被葬者の交渉範囲をしめすものであろう。

北東部におけるこの時期の前方後円墳は数える程度（確実なものは4基）にまで減少する。豊前荏田の御所山は菅田御廟山類型の墳形、埋葬施設はやや特異な筑肥A型である。番塚は小規模の北部九州型の横穴式石室、この時期に異例とも言える釘止め木棺を用いる。

東南部の日向・大隅では、西都原での前方後円墳の築造が停止し、長期継続型の川南・持田・本庄古墳群などで小規模の前方後円墳が築造され続けるのみである。男狭穂塚に後続する大型墳は大隅の横瀬大塚である（墳長約140m、墳形は大仙類型）本段階の後半によく松本塚（104m、墳形は土師ニサンザイ類型）が登場する。男狭穂塚後の大型墳は大隅の横瀬大塚である。墳長約140m、大仙類型の墳形である。松本塚は横瀬大塚に続く大型墳だが規模の縮小が著しい。

(5) 第5・6段階

築造系譜が限定されていた前段階に比べて、本段階は分布したほとんどの小地域で復活する。

小型墳が多いなかで、墳長100m級の前方後円墳が継続する系譜が新たに登場する。第5・6段階は一括して記述する。

北部では、前段階から大型墳が営まれた津屋崎が墳丘規模と継続性において卓越する。複数の築造系譜のうち須多田系譜が優勢で、80～100m級が4基継続する。嘉穂南部でもやや安定した築造系譜をたどることができる。60～80級の中型墳の一群と40～50m級の小型の一群に分かれるが、詳細不明のものが多い。福岡や糸島では継続的な築造系譜のほか、群集墳の盟主墳の事例が多い。なお、編年図にしめしていないが、玄界灘の壱岐では6世紀中葉に新たな築造系譜が登場し、6世紀末葉以降、大型円墳に移行する。

中西部も北部と同様な築造動向をしめす。なかでも突出した墳丘規模と安定した築造を継続するのは、筑後の八女と肥後の氷川流域である。八女系譜は岩戸山に始まり鶴見山にいたる墳長70～140mの4基のほか、30～50m級の小型墳5基や複数の大型円墳が同一墓域内に営まれており、この時期では珍しい小規模な階層構成型をとる。野津系譜は野津古墳群を構成する5基と墓域を異にする2基が併行して築造される。墳丘と石室規模は肥後のなかでも卓越する。この2系列のほかに、肥前南部の鳥栖、筑後の吉井・浮羽などは墳丘規模が比較的大きく継続性もみられる。

北東部では前方後円墳の地域的偏在がきわめて顕著である。豊後の大分・海部に前方後円墳は皆無、大野川中流域と筑紫平野に開けた筑後川上流域の日田・玖珠に分布するにすぎない。後二者はこの段階になって新たに前方後円墳を築造する地域である。これに対して豊前側の築造状況は刮目すべきものがある。周防灘に面した曾根平野と京都平野では、前者が8基、京都平野ではじつに13基の前方後円墳が築造される。曾根では墳長が30m以下の2基と、埴輪を樹立する40～70m級の5基があり、後者が主系列をなす。京都平野の前方後円墳は河川流域に沿って点在する。なかでも長峽川流域の系列が墳丘規模で他系列を圧倒し、この地域を代表する首長系譜である。なおこの地域では前方後円墳築造停止後、首長墳は大型の方墳ないし円墳に変化する。

東南部の大隅はこの時期の前方後円墳は未確認、日向では宮崎平野部のみで築造される。長期継続型古墳群（川南・持田・本庄）に墳長30～50m程度の小型墳が継続するほか、西都原と対向する一ツ瀬川左岸と、生目と対向する大淀川左岸に大型前方後円墳群が新たに登場する。前者のぎおんぼる祇園原古墳群は前～中期の前方後円墳を含めて13基の前方後円墳があり、8基が本時期と推測される。墳長50～100mの大中型墳とそれ以下の小型墳に分れ、ほぼ併行して築造される。後者のしもきたがた下北方古墳群は5基の前方後円墳があるが、1基は墳形を確定できない。そのうちの3基が本時期に属する。墳長は約70～90m弱、祇園原とほぼ等しい。この二つの系譜は、それぞれ前～中期に盟主的首長墓を輩出した西都原や生目古墳群に近接し、6世紀初頭前後から後葉に継続する。墳丘規模からみて、日向を二分する首長勢力であろう。

3. 築造過程における二つの変動

以上、駆け足で観察結果をたどったが、記述から明らかなように4つの地域に共通しておおよそ第3段階の初めごろ（中期初頭～前葉）と、第4段階末から第5段階初めごろ（中期末～後期初頭）の二つの時期に大きな変動がみとめられる。

(1) 第1の変動

前～中期の境ごろに、前方後円墳を含む首長墳の築造過程に変動があることはやくに都出比

呂志が主張している。都出は京都府桂川水系の首長系譜の変化をもとに、5世紀前葉、5世紀後葉、6世紀前葉の3回の首長系譜の変動を読みとり、それが地域内の自律的な動きにとどまらず古墳時代の政治変動と密接に連動したものとする(都出1988)。その後、5世紀前葉の変動の前に4世紀後葉の変動を加えて都合4回の首長系譜の変動をみとめている(都出1999)。

筆者もこの提起に学びつつ九州北部の筑前地域と南九州地域について検討し、中期初～前葉と中期末～後期前葉にかけて首長系譜の形成過程に大きな変動があることを確認したが、都出が提起した4回にわたる首長系譜の変動のすべてについて十分に把握し得ていない(柳沢1995、95)。

中期初頭初頭～前葉の変動は(現在の筆者の年代観で言えば4世紀後葉～5世紀初頭ごろと想定している)、あるいは前後2度にわたる変動を想定したほうがよいかもかもしれない。

一つは仲津山類型の大型墳が登場する時期である。九州では、日向西都原の女狭穂塚、肥前の船塚、肥後の岩原双子塚などである。女狭穂塚の築造は、西都原の先行する6～7系譜の断絶をともしない、同時に日向・大隅に柄鏡形類型の墳形は駆逐させた。また周辺の小系譜の断絶や長期継続型古墳群でも規模の縮小、ないし帆立貝形古墳へと墳形変化を引き起こしている。

肥後の岩原双子塚は先行する首長墳とは離れた場所に立地する。築造を契機に菊池川中流域だけでなく下流域でも先行する首長系譜の新たな造墓が停止する。菊池川流域から離れるが、宇土半島で大型墳の築造が停止する時期ともほぼ一致するのも偶然ではないだろう。肥前の船塚のばあい、近接する小地域の首長系譜が円墳化ないし墳丘規模の縮小が連動している。

いまひとつは大型墳のその後の時期である。女狭穂塚に男狭穂塚が継続するが、岩原双子塚や船塚は大型墳を後続せず、いずれの地域も後続する首長墳は円墳化や小型化ないしが顕著である。豊後でも亀塚・築山の大型墳を最後に前方後円墳の築造が急激に衰退する。

こうした変動期を境にして、北部の津屋崎や中西部の筑後の久留米に有力な首長系譜が出現することになる。

以上の九州の主要古墳群の変動に連動するように、周辺の小系譜の前方後円墳の築造過程にもなにかしかな変化がみとめられる。こうした変動構造も注意すべきであろう。いずれにしても、地域首長は王権をめぐる政治変動に無関係でなかったのである。

これ対して、前方後円墳の築造を王権との関係のみで理解すべきでなく、一国程度の範囲をもつ「地域ごとの自立的な結合や相互関係」を重視すべきだと主張する見解もある(松木2000)。たしかに、地域首長は王権との関係のみで存立しえたのではなく、他地域首長との相互関係が在りでの安定した首長権の保証につながることは確かであろう。しかし首長系譜の前方後円墳築造の可否は地域首長権の承認を伴った可能性がたかい。重要な指摘だが、広域にわたる変動背景にはつよいインパクトが必要であろう。

(2) 第2の変動

中～後期の境を前後して、各地域における前方後円墳築造の活発化＝首長系譜の著しい現象がみられる。都出は、中～後期境の変動を①雄略大王の登場による「伝統的な支配システムを支える首長間の横のネットワークの破壊」に伴う変動(5世紀後半)＝新興首長層の登用、②継体大王登場と密接に関連する政治変動(6世紀前葉)の前後2回を想定している(都出1999)。

この時期になって新たに築造された前方後円墳は、総じて墳丘規模が小さく、群集墳の盟主的な位置にあるもの、1基の築造で終わるもの、継続してもせいぜい2代程度のものなどが多い。

そのなかで、第5段階に新たに築造が始まり、墳長60～80mないしそれ以上の大型墳を前方後円墳築造の停止期まで安定的に継続する築造系譜の存在は注意される。北部の津屋崎、中西部の筑後の八女、肥後の氷川下流域（野津）、東南部の祇園原、下北方などの諸系譜である。

この時期の前方後円墳の膨大な復活的築造は、6世紀初めころの王権による地域支配の再編＝直接的把握にあたっての、地域首長の確認という背景があったのではないか。継体大王の時代のことであろう。さきに掲げた大型系譜の安定した継続は、それだけでは説明できない。のちの国造制につながるような地位の承認も同時に進行したのではないかと考えたい。そうした地位の獲得が安定した前方後円墳築造を保証したのであろう。

4. 松山平野における後期前方後円墳の造墓背景

松山平野は小稿の第4段階後半（中期末）の波賀部神社古墳に始まり、第6段階の二ツ塚にいたる13基の前方後円墳の存在が明らかにされている（松山市教育委員会2003）。それらは東部に8基、南部3基、北部1基に分散する。こうした後期に爆発的に増加する築造状況は、先述した豊前の京都・長野平野の様相との類似性が顕著である。松山平野にしても、豊前の二平野にしても、きわめて異例の築造状況である。

これまで松山平野と九州の関係は、「階段式」と呼ぶ特異な構造の横穴式石室の系譜をめぐって議論されてきた。近年、下條信行は葉佐池古墳古墳の2号石室構造を検討し、番塚や鶴見山古墳など豊前の横穴式石室との共通性を指摘し、この種石室の源流地の候補とした（下條2003）。下條が指摘するように石室を構成する各種属性レベルで比較すれば、「階段式」横穴式石室の祖型は北部九州の石室を候補とする以外にない。

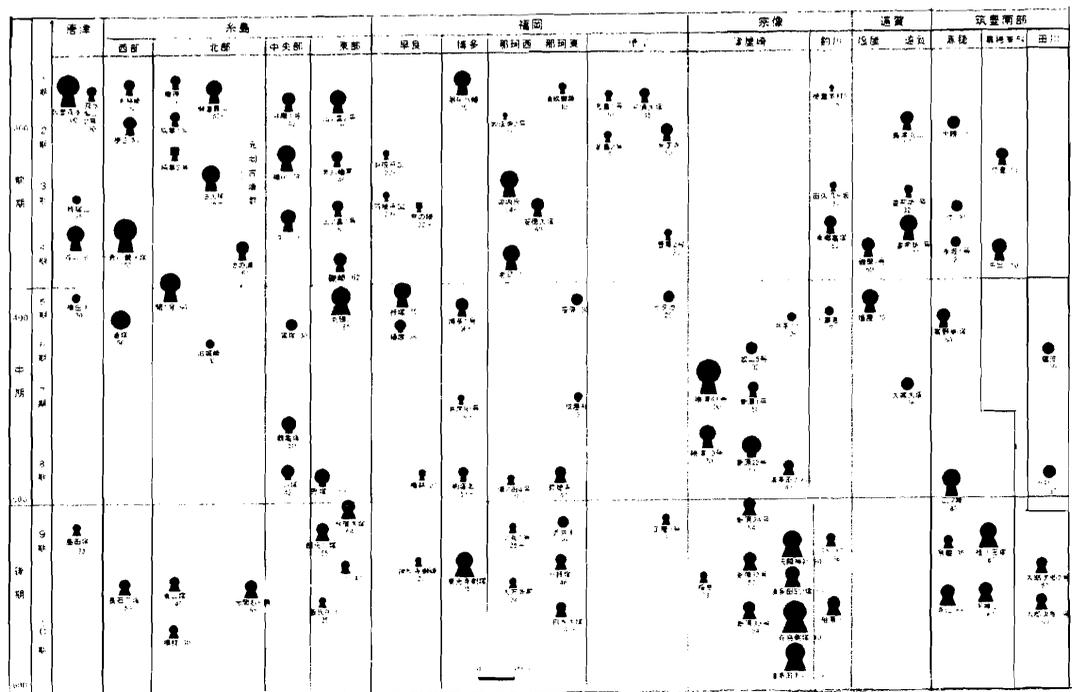
ワカタケル（雄略）大王の時代、倭王権は百済との親密な外交関係をもち、熊津遷都後の百済復興を積極的に支援した。山尾幸久によれば、王権は各地の地方首長を百済へ派遣したという（山尾1998）。番塚古墳は、釘止め木棺を使用し棺飾金具を伴う。百済から移入されたものである。近年、朝鮮半島全南地方で九州系横穴式石室の築造が判明しているが、海南の造山古墳の横穴式石室は番塚式である（柳沢2001）。番塚の被葬者は百済に派遣され、全南地方の領有政策に関与したのであろう。

百済支援は6世紀に継続する一方、加耶をめぐる新羅の攻勢が激化し、6世紀前葉には加耶の一部が新羅に奪われた。この間、幾たびも多数の軍士が派遣された。朝鮮半島南部の緊張の高まりのなかで、軍士の派遣、物資の補給などが恒常化し、物資の保管や宿泊などの恒常的な施設が必要となったはずである。

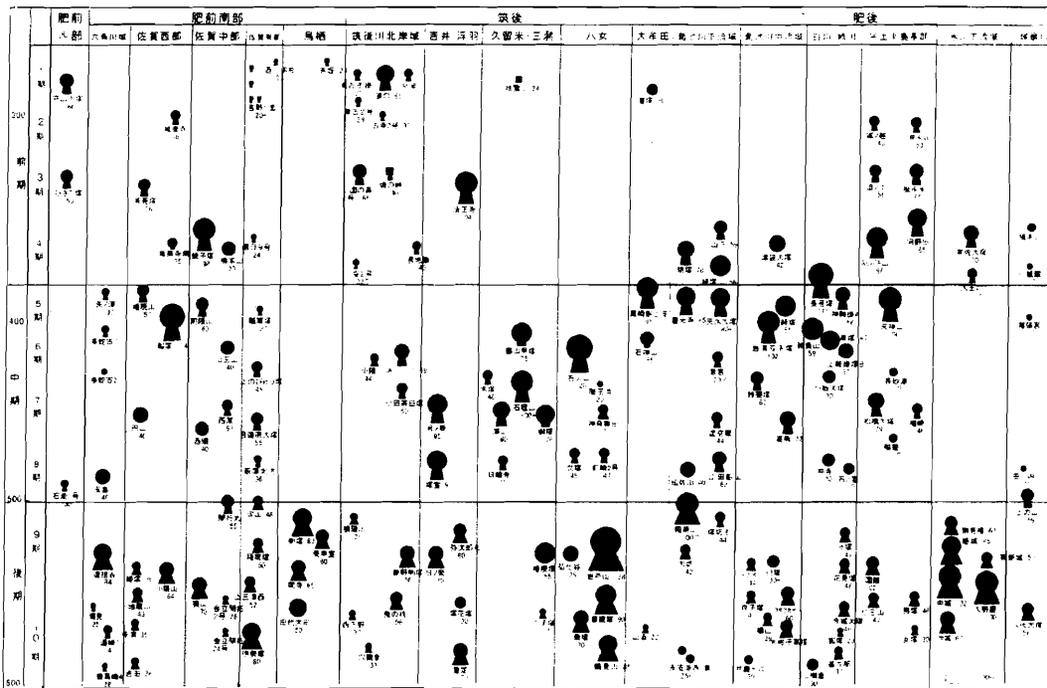
こうした事情に対応するため、王権主導のもとに伊予灘に面する河口に津と各種の施設が設置された可能性がたかい。松山平野と豊前の二平野で本格的な前方後円墳の築造が始まるのは5世紀末葉、番塚の築造とほぼ等しい時期である。豊前の二平野も同様の施設が整備されたのであろう。両地域をあいだで人・物・情報が行き交った。周防灘を挟む二つの地域で前方後円墳の活発な造墓という異例な事態が共通する背景に、こうした事情を交流を想定し得るのではないか。松山平野東部の前方後円墳には、三島神社古墳のように畿内型横穴式石室も築造される。津の管理や物資の調達などで王権管理機構とのあいだに密接な交渉があったことをしめしている。

【文献】

- 大久保徹也 1996a 「四国における前方後円墳の不均等分布－古墳時代前期の様相－」『中四研だより』 4
- 大久保徹也 1996b 「讃岐と阿波－四国における前方後円墳不均等分布の一面－」『中四研だより』 5
- 下條信行2003 「結語」『葉佐池古墳』（松山市文化財調査報告書92）
- 都出比呂志1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』 22号史学篇
- 都出比呂志1999 「首長系譜変動パターン論序説」『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』（平成8年度～平成10年度科学研究費補助金（基盤B・一般2）研究成果報告書）、大阪大学文学部
- 橋本達也 1998 「古墳群の形成と地域政権」『川と人間－吉野川流域史－』 溪水社
- 橋本達也 2000 「四国における古墳築造地域の動態」『前方後円墳を考える』 古代学研究会四国支部第14会大会 研究発表要旨集
- 松木武彦 2000 「古墳時代首長系譜論の再検討－西日本を対象に－」『考古学研究』 第47巻第1号
- 松山市教育委員会2003 『葉佐池古墳』（松山市文化財調査報告書92）
- 柳沢一男 1995 「日向における古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』 第9号
- 柳沢一男 1995 「筑前における古墳時代首長墓の動向」『九州における古墳時代首長墓の動向』九州考古学会・宮崎考古学会合同学会発表要旨資料
- 柳沢一男 2001 「全南地方の栄山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『朝鮮学報』 179（朝鮮学会編『前方後円墳と古代日朝関係』所収、同成社、2002）
- 山尾幸久 1998 「磐井の乱の時代背景」『増補改訂版 古代最大の内戦 磐井の乱』 大和書房
- 和田晴吾1987 「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』 第34巻第2号

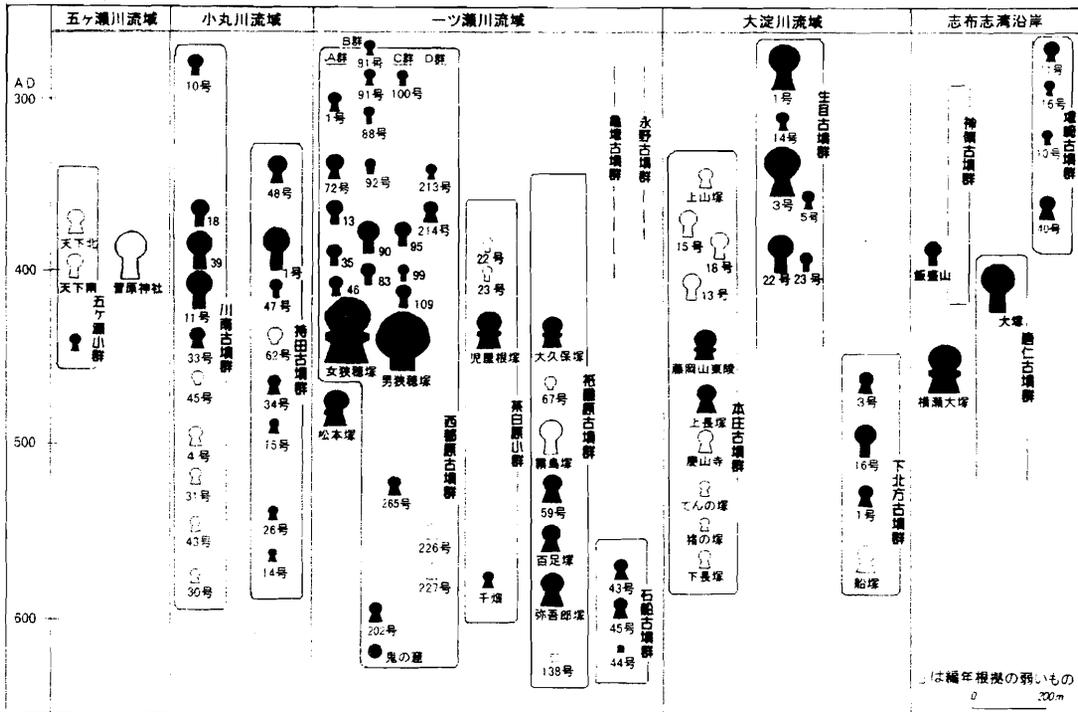


第1図 九州北部における首長墳の消長

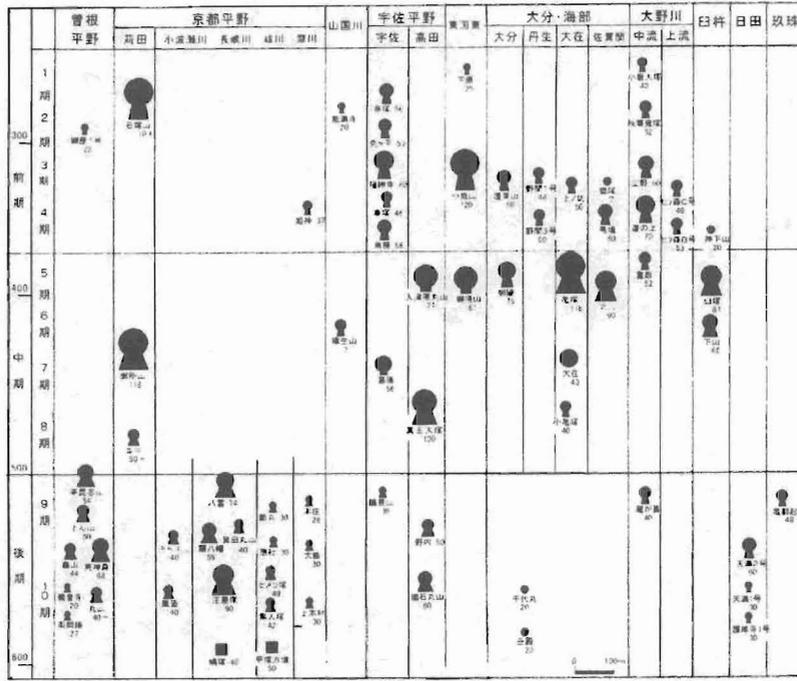


第2図 九州中西部における首長墳の消長

資料 肥前: 西谷1993、筑後は中山1993、肥後は西谷・磯谷1998を筆者が作成した。



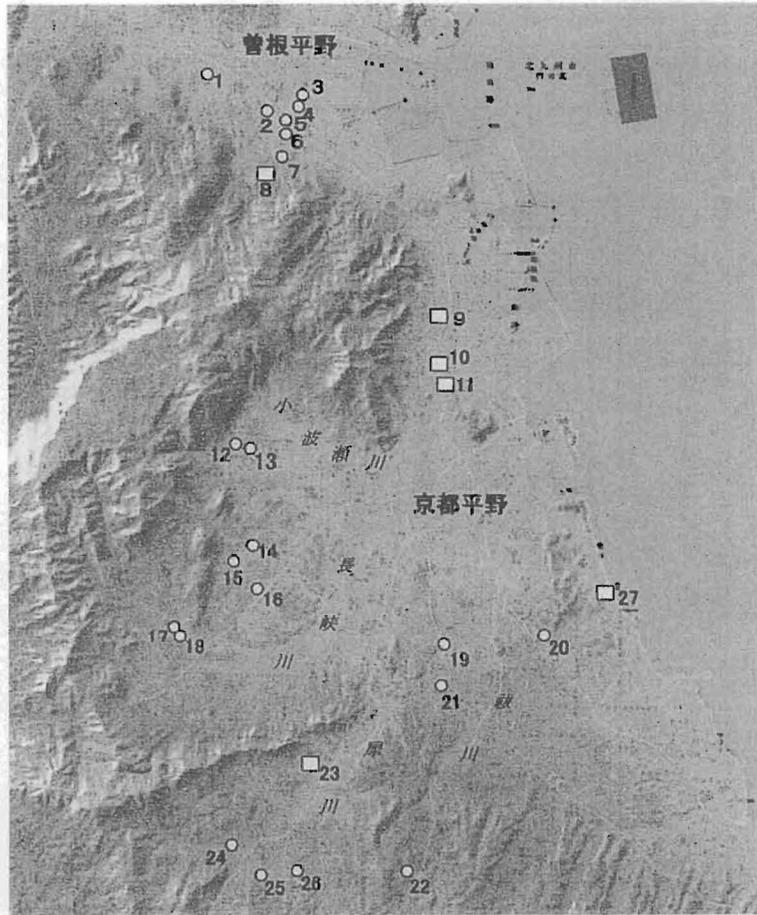
第3図 九州南東部における首長墳の消長 アミ部は柄鏡形類型墳の築造期



第4図 九州北東部における首長墳の消長



第5図 豊前・豊後における
前方後円墳の分布図



第6図 豊前曾根・京都平野の前方後円墳 (□は前・中期の前方後円墳)

1. 観音寺 2. 嵐山 3. 荒神森 4. 丸山 5. 上ん山 6. 茶毘志山 7. 両岡様1号
 8. 御座1号 9. 石塚山 10. 番塚 11. 御所山 12. 黒添ヌメ塚 13. 徳永丸山
 14. 八雷 15. 寺田川 16. 庄屋塚 17. 扇八幡 18. 箕田丸山 19. ヒメ塚
 20. 惣社 21. 華人塚 22. 節丸 23. 姫神 24. 本庄 25. 大熊 26. 上大村 27. 石並

※アンダーライン : _____ は前・中期、 _____ は墳輪出土、 _____ は横穴式石室